

新体詩歌序

古人云フ蛙モ亦歌仲間ナリト善哉言ヤ夫レ人喜悲
哀樂ヲ心ニ感スル者アレバ則チ必ス之ヲ其口ニ發
ス其發スルヤ流暢音律アル皆歌ナリ彼ノ詩三百篇
亦只口ニ發スル所兒童モ謡ヒ婦女モ和ス何ソ別ニ
謂ハレアラシヤ西洋諸國ノ詩ニ於ケル亦然リ其平
常用フル所ノ語ヲ以テ其心ニ感スル所ヲ述ベ而シ
テ之ヲ歌フ耳我國ト雖モ往古ニ在テハ其平常用ル
所ノ詞ヲ以テ歌ヲ作りシナリ今時ニ至テハ則チ然
ラス詩ヲ作レハ漢語ヲ用ヒ歌ヲ作レハ古語ヲ用ヒ
苟モ平常用ル所ノ言語ノ其中ニ在ル有レバ俚俗鄙



16
20
48
50
84
20
114

字
下
業
明
有
六
十
二
番
地

縣
以
善
治
應
心

一
般
琦
玉
縣
平
民

ム可シトナシテ而ノ之ヲ採ラバ遂ニ今日ノ歌ナル者ハ學者社會ニノミ行ハレ而ノ其他ニ至テハ容易ニ之ヲ知ル能ハサルニ至ル豈ニ謬見ト云ハサルベケンヤ蓋シ國ノ次第ニ開明ニ赴クニ從ヒ交通ノ日々ニ繁劇ナルヨリ各地ノ言語ハ各地ノ事物ト同シク其内國ニ混入シ漸ク平常人ノ用フル所トナル即チ之ヲ其國ノ言語トシテ差支ナキ筈也詩ニモ歌ニモ用ヒテ妨ナキ理ナリ然ルニ彼ノ謬見者流ハ開明ノ運轉スル所以ヲ知ラズ苟モ歌ト云ヘハ古言ヨリ外ハ用フルノ成ラヌ様ニ云ヒナセリ此ノ如ンバ事實ニ於テ不都合ヲ生スルノモ少カラサルベシ假令ヘバも此、ふ此弓矢ト云フ可キモ今時ハ「スナイドル」ヲ擔フノナレバもの、ふ此「スナイドル」ト云ヒタリトテ差支ナキ筈ナリ而ルモ是非ニ弓矢ト云ハ子バナヲヌトスルハ事實ニ於テ不都合ナラズヤ之ハ是レ「スナイドル」ト云フ詞已ニ國言トナリシヲ解セサルノ謬也若シ夫レ古言雅言ヲ以テ長歌短歌ヲ並ブルモ其平生ニ用ヒサルノ言語ナレバ殆ド外國語ヲ以テ歌ヲ作ルノ思ヒ有テ十分ニ己ガ情懷ヲ寫シ出スヲ得サルノ憾ナキ能ハズ古語ハ古代ノ通言ナリ今言ハ今代ノ通言ナリ古人ハ古ノ語ヲ以テ作ル今人ハ今ノ語ヲ以テ作ル何ノ効力之ア

ラン然ルヲ故ラニ小六ヶ敷古書杯ヲ捻クルハ實ニ
 笑フ可キ至リナラスヤ余此説ヲ持スルヲ久シ頃者
 竹内君新体詩歌ノ編アリト余ニ其序ヲ請ハル余夙
 ニ茲ニ志アリ故ニ樂ンテ而シ之ヲ言フ明治十五年
 八月新橋橋居ニ於テ

屈山小室弘識

緒言

- 一此編數首泰西之名家シエーキビーヤ氏之原撰而
 我邦洋學家之係干翻譯
- 一誠忠遺訓外二三首者我國固有之長歌也
- 一又長歌中撰者姓名等屬干漫然者有一二首今不暇
 檢正讀者幸諒之
- 一此編不言古今体詩歌言新体者新体以居其八九也
 亦不言詩撰而言詩歌者在彼言箴在我言歌其理同
 也觀者莫為異以焉
- 一編中僅々評語其不附者他日為有所請諸先輩

明治十五年八月

嶮谷 竹内節議

新体詩歌第一集

目次

○楠正成櫻井驛よ於て正行へ遺訓之歌○直實敦盛
 を追ふの歌○月照の入水を悼みて讀める歌○舞曲
 よ擬して作る歌○自由れ歌○顯理四世を讀める○
 ハムレット●玉の緒の歌●抜刀隊○花月の歌○ウ
 ルゼー●大佛ふ詣てゝ感あり
 以上十二篇

新体詩歌第二集

目次

●勸學の詩●春夏秋冬の詩●カムフヘル氏英國海
 軍の詩●シヤール ドレア^ン氏春の詩●雨詩和譯
 ●刺客を詠するの詩●外交の歌●倭基朝臣東下り
 ●藤袴の歌●小督の歌●東の花●長恨歌●櫻狩●
 芙蓉を詠するの歌●西行の歌
 以上十五篇

新体歌詩第三集

目次

○テニソン氏輕騎隊進撃ハ詩○朝鏡の花ヲ寄せて
 學童を獎勵モ○題秋(西詩和譯)○ロングフエロー
 氏人生の詩○ロングフエロー氏兒童ハ詩●社會學
 の原理ハ題モ○遊墨水歌○詠和氣公清麻呂歌
 以上八篇

新体詩歌第四集

目次

●虞禮氏墳上感懷ハ詩○小楠公を詠むるの詩○代
 悲白頭翁歌●寒村夜歸○西詩和譯○詠史○吊忠魂
 歌
 以上七篇

新体詩歌第五集

目次

- 世渡りの歌
 - 夏夜即事
 - 送學友歸鄉歌
 - 見燭蛾有感
 - 湘南秋信
 - チヤールス、キングスレー氏 悲歌
 - 詠松島歌
 - 佐久間象山謫居の歌
 - 西南の役より凱陣せし人を祝するの歌
 - 詠石莖歌
- 以上十篇

新体詩歌

小室屈山校閲

竹内節編輯

●楠正成櫻井驛ふ於て正行へ遺訓の歌

建武の昔一正成ひとせの肌の守りを取り出し

是の一歳ひとせ都攻めの有りし時下し給ひし論旨あり

之を汝ふ與ふるなり。余は免れ角ふかるるらば

世は尊氏死せと成りて。嚴慮を惱し奉らんは

鏡よかけて見るが如し。さし去り乍ら正行よ

父の子からば流石ふも。忠義は道の無て知る

弓張月の影暗く。家名を汚すと勿き

打渡さきし浪黨を。あはれみ扶助し隱家の
吉野の山の奥深く。月の挂さの連つらや
流れも清き菊水の。旗を再び翻へし
敵を千里お逐ひ退けて。敵慮を安んじ奉れ
嗚呼慮敵安んじ奉れ

●熊谷直賢曉ふ敦盛を追ふの歌

抑も熊谷直賢を。征夷將軍頼朝公の御内ふ
關東一の旗頭。智勇無備は大将と
世ふも知られし勇士なり。左まば元暦元年は頃
源平須磨の戦ひふ。功名ありし物語り
聞くも中々あわれなり。その時平家の武者一騎

沖なる船は後ましと駒を浪間より打入れて
一丁許り進みしを。扇を揚げて呼び戻し
互よしのぎを削りしが見れば二八の作顔削
花も粧ふ薄化粧。涅齒ねくろく黒々と附けぬひ
斯るやさしき打扮いでたお君は如何なる御方ぞ
名乗り給へとありければ下より御聲爽かに
我こそい參議經盛は三男無官の太夫敦盛ぞ
早々首をうたきよと面より向ひて手を合
流石にたけき熊谷も我が子の事まで思ひやり
落はる涙いと、まらず鎧の袖は絞りつ、
是非おく太刀を振り揚て南無阿彌陀佛の聲諸共し

首の前よと落ちふける。無残や花の蒼さへ
 須磨の嵐ふ散りふけり。之を菩提の種として
 永々跡を吊ひ申さんと御を死體ふ言ひ遺こし
 青葉の笛を取添へて。八島の陣へ送りしに
 寶よあさけある武夫の心の中ぞあわれあり
 その身の遂よ蓮生法師と名のりつゝ、
 都ふ登り元祖大師を師頼み。剃髮禪衣を身と成て
 晝夜念佛怠らず。日出度往生し給ひけり
 ○月照僧の入水をいたみて讀める歌
 平野次郎國臣作
 花の都も秋の猶夕ふべ淋まき風情あり

名は流れたる清水や落ち来る瀧の乙羽山
 秋虫葉色の溝ことふ散るや紅葉のちりくくと
 亂れゆく世の浪花江や蘆のさはりの繁くとも
 猶世のあめふ身をつくり盡くさんとも筑紫瀉
 波影の岸の沈ならぬ操をいつか深緑
 色は替らぬ青柳の驛路を越て香椎瀉
 たゝの橋を打ち渡り千代の松原千代かけて
 萬代うけて君が世の千ト歳の松ふよとへつゝ
 神よ歩みを箱崎の社よかゝり四ツ文字の
 筆の主をよく問へば延喜の帝畏しこくも
 御手をば下りませりつゝ、爰もむかいは石畳み

重ねくくし白浪のよせま昔し忘れりと
 恨み浦半の片禰か^かけて歎くも隣れをり
 沾衣塚の沾衣吾が身^か着たる心地せり
 やがて博多の假住居こゝも浪風さ^かがしく
 又行く方の薩摩瀉沖の小島ふあらねども
 心細くも都よて誰かあ^かきと思ふらん
 たよる心筑紫瀉一人の外よ打あけて
 語ふ人も浮き枕ら波路へだて、野間の關屋の關守
 ふせきとめられて又舟よ
 乗るも夫と寄あだよ波よゆられて行く先の
 黒の瀬戸てふ名もうしや頼て鹿兒島かどの鳥

つむき縮めて潜みしが又木枯の風とかどろきて
 日向を指えて船出せし日に神無月望の夜は
 傾く月と諸共に照りかがやきてくもりなき
 身の大君の爲ふとて爰よ一人の薩摩瀉
 いかちる縁ふし前の世ふ契も深き船の沖
 底の藻屑をふりぬるを乗合人元船人も
 耀の雫も露程を^さぞと^し知らぬ白浪の
 立ちさ^かいげども甲斐ぞなき猶東雲の明け鴉
 なくより外のなかにけり
 ●舞曲ふ擬して作る 久坂國武作
 世はかき菰を亂れつ、赤根さま日もいせくらく

蟬の小川ふきりたちて隔てれ雲をかりふけそ
 うら傷まゑや玉さこる内裡ふ朝暮をのゐせし
 賢美朝臣ふ季朝卿。壬生澤四條東久世
 其外錦小路殿今うた草の定めおく
 旅ふしあるを駒さへも進み兼てぞいをりつゝ
 降しく雨の絶間おく涙ふ袖に濡はてゝ
 是より海山淺芳原露霜こけてあゝかする
 浪花の浦ふたく鹽のからき浮世えものかゝせ
 行かんやをれを東山峯の秋風身ふしみて
 朝お夕なふ聞おきし妙法院の鐘の音は
 おへて今宵のあわれを。何時しか暗き雲霧を

いらひ盡して百敷の都の月をしめ給ふらん

○自由の歌

小室 屈山

天よ自由の鬼とあり地よ自由の人たらん
 自由よ自由やよ自由。汝と我まがその中を
 天地自然の約束ぞ。千代も八千代も末かゝて
 此世のあらん限りまで。二人が中の約束を
 いかふぞ仇ふ破るべき。さゝさりながら世に中の
 月ふ村雲花ふ風まゝ。ふおらぬは人れ身ぞ
 話せば長いとあから古し羅馬の國を聞く
 その人民を自由ふし。共和の政治を立てんため
 數多の人のうき苦勞。それをも知らず愁のため

我權勢を張らんとして再び帝位を昇らんや
 企てたりしセサルはその親友の手ふかゝり
 議員の中より殺せられたりその親友のいふことよ
 民を奴隷となさんより寧ろセサルを殺さばや
 我の羅馬を愛するの親友よりも甚し
 羅馬民の望みから我身も茲に諸共
 捨る命はいと易し佛蘭西國のルイス帝
 自由を壓制をさんとして種々ふ手段を廻せど
 邪道といかゝ正道ふ打ちかつことなるべきぞ
 民のいかりは火に如く又洪水の溢れ来て
 岩をも碎く勢ひふいと畏くも帝王は

黄金をかざす冠の断頭機械の上より落ち
 あいまはかゝりけるに誰を怨みん壓制の
 自業自得といふべけれ英吉利國の革命も
 同じ車の一ツ轆昨日の王の今日の賊
 コロンウエルが手は持ちし自由の旗の招きふに
 天をも回らむ計りふてチャーレス王を誅戮し
 自由の基を立てたりき北亞米利加の今衆國
 もと英國の民をれど其發端をたむぬれむ
 自由の人とありたさふ故郷の名残り氣も止めず
 深山荆棘はまだ愚か人のふみてしともあき
 あを海原を打ち渡す見も知るせぬ亞米利加へ

殖民をせし心根。いかふあはれふ思ふらめ
 然るも猶も英吉利のほだしの網に離られず
 暴君汚吏の壓制ふ詰る詰るて國の爲め
 義兵を擧ぐると死からふ我後じきと親も子も
 死ぬる覺悟で七年の長の月日お攻め守り
 遂に敵をば追ひ拂ひ目出度立てし獨立國
 ワシントンの名ふ負へる輝と共ふ榮へゆく
 國の布まれや勇まし、嗚呼彼と云ひおれと云ひ
 自由の爲ふの昔より幾多の人の生死別れ
 又死しよかれをるものを我東洋の人ぢやとて
 土地ふかまりのあるなきとあどか心よ變るべき

人の自由といふものの天地自然の道あるぞ
 つとめよ勵め諸ひとよ卑屈の民と云はるゝを
 余此文をかきおはる時にも春の夢枕
 眠りをさまを鐘の音のいともさやかに聞へける

●ヘンリー四世

外山正一譯

ヘンリー四世その初ランカストルの「ギウク」た
 る一旦謀反企て、六万人の將を率いてリチャード
 王と戦ひて王を俘ふなしたれを自ら立て王と
 かり四方に逆威を震るひしも皇天いかで亂臣を
 安穩ふ去て置くべきや禍亂交も起り立ち戦争止
 む時更になくウエルス人の蜂起せりスコット人

の責め入れりヘルセー一家叛逆す。王を暗殺謀る
 ものその數いと多かりた。議員の権理を打ち守
 る王は烈しく抵抗を財政最とも困難し王の人望
 失てひ健康漸く衰へてその晩年は至るての自
 ら悔ゆるその無事心で心責められて安眠せての
 片時なまをとならぬ苦志さよ。此一篇のこまぞ是
 きその有様やうつしたる。シエキビールの名作ぞ
 廣き世界のそれ中。王者の數は多けれどヘンリ
 ー四世おらざるは幾人ありや聞まほし
 いと下賤なる我人の枕を高く高いびき
 今も睡るその數は幾千万あるならん

嗚呼うらやまゝ羨し眠るの神よ眠り神

天より我に賜りて知することそ云ふべけれ
 如何なる罪のためりや眠の神よ見はあさま
 たとへ暫時は間たりとも胸のくるしさをた
 まぶたを閉て眠らんといかよすきども眠られず
 そも如何をまじば眠神見る影もなきあばら家の
 くまがりかへる蕪の床むさくるしきえいとすよ
 心地もよげふ横わり枕のふとりバタ／＼と
 飛び来る虫の羽音さへ眠りを誘ふ助
 まや／＼眠るもれあるふ伽羅沈香をたきたて、
 床の上なる天蓋の金襴段子もて作り

眠を誘ふ樂の音のいと心地よく聞ゆなる
 貴人高位の閨までし何として來ることのなき
 げは愚かある神ぞかし何故に斯く見苦しき
 不潔を床に横ゆる下賤なものと寐にするも
 王者の床に來らぬぞ金の時計と號鐘と
 此べの者にいならぬのをはていぶかしき神れ意ぞ
 ゆらくゆるる、帆柱の高き上ふも安くねる
 水夫の目を閉さしておさけ用捨も荒浪や
 吹き來る嵐凄しくうづまく浪をまさあげて
 天地をどろく浪音の死人もさむる程なるよ
 下の無間の地獄ある高き柱のその上て

浪のゆらめを眠らす神の力ぞ不思議ある
 惣身水にひたさきて身を粉にくたく水夫にい
 かくさいがしき其折も眠るの神に付き添ふふ
 草木も眠る丑滿時眠を誘ふその工夫
 手を替へ品をかゆるやえ王者の側は來らぬに
 依怙負ある神よおそあ、幸多き賤が身の
 寝るやねむれや羨しつらく思ひ合まれば
 冠り着たる頭ほど苦しきもの世にあらど

● ハムレツト

井上 祐次郎譯

ちがらふべきか但し又ちがらふべし非るか
 爰が思案のしどあるぞ運命いかふ拙れも

これに堪へるがまそらをか。又さうあらで海よりも
 深き遺恨に手向ふて之をはらまがもの、ふか
 どふも心ふ落ぬる。扱ても死か死ぬるのは
 眠ると同じ眠る間に心痛のみか肉体の
 あらゆるうきめ打捨つ是ぞ望のはてならん
 ア、しぬねむるねむる時若しも夢みるとあらば
 ハアこたじりか有様ぢやなせや云ふよ死にねむり
 無常の風ふきそつれて此娑婆離れしもれ、ふとも
 如何なる夢の来るやらハテ疑ひの暗れぬもの
 うきと長く忍ぶのもおまが爲かふ、ぜをまむ
 九寸五分さへえちたきば其切先きで一トつきふ

事をするすもやすけれど之をば爲さず慎まて
 強者は非道せれをしり驕まる人のつかぬ
 思ふ美人は不深切。綴みすぎたる國の法
 貴人の無禮又たとへ下人とならば善とても
 軽しめらるゝ之を是れ堪へ忍ぶは何故ぞ
 重荷を負ひて汗流しうい目けらい目こらへつ、
 暮らせぬくらし暮らほの亦何故ぞ是のみを
 死後の恐が有からぢや死出の山路の不思議ある
 登てかへる人ぞなき如何なるとあるやらん
 物をごくこそ思はるれとへ此世ふ止まりて
 うさ艱難をかむるともあの世のといおそろしや

○井上巽軒曰。畏死之情。述得精妙。かくと心よ思ふ故。たけ死心も弱くなり。如何ある深き大望も。花をひらかす枯うせて。實れなるとぞ。あかり鳥左はさりあがら才ヒリヤよア、たをやかちその風情を。なたい神を禱るなら。己ーが罪障わびてたべ

○玉の緒の歌

井上 栞次郎譯

眠る心いぬるあり見ゆる形は。おぼろなり。あすをも知らぬ我命。あまればかち死夢ぞか。ほど、あまきふいふの惡し我命こそまことあまき。我命こそたましがあまき。墓はわりの場所ならす

人は塵ふて又散るといふは。かたの上のあまき。人の願ひの喜びか。人のねがひは悲みか。人の願ひおれあまき。唯怠らず働きて。今日よりまさる明日を。まて業の久しく時の馳す。強き胸だも亦たへず。鼓に如く打ちつ、け。一日くくと近くなる。死出の旅を。を速すあるあらそ。ひ多き世の中よ。此身をよせてさたがけよ。ありてますく進むべ。言を死望となるあか。れ牽る、牛となる勿れ。如何ふ未来は。樂しきもいか。空き過去なるも。やもふこれを。ば捨て置きて。これを忘れず神を。しり

はたらくべは今日ばかり。まぐまたる人世ふ多し
我れやても人相同じ。勉めえげめば斯くならん
ゆめ怠らむ務めなば長く残さん此名をば
海より荒き世の中ふ舟失ひて浪の間よ
獨り漂ふ我友の我名をきよて勇まらん
我名をきれて進まらん
さすれば人は氣を張りて事業はかりし心して
如何ある運もとせす高さふ至れ馳せゆけよ
たのしみあるそ働けよ

●弘云詞句精巧押韻自在敬服々々

●抜刀隊

外山正一作

我の官軍我が敵の天。地容れざる朝敵ぞ
敵の大將たるも壯の古今無双の英雄で
之に従ふつものい。やもふ慄悍決外の士
鬼神のいぢぬ勇あるも天の許さぬ叛逆を
起せしものい昔より。榮へしためしのあらざるぞ
敵の亡ふる夫までは進めやまめ諸共よ
玉ちる劔ぬきつれて死ぬる覺悟で進むべし
皇國の風ともものふの其身を護る靈たましいの
維新おのかたをたれたる日本刀の今更よ
又世よいづる身のほまれ敵も身方も諸共に
刃の下よ死をべきぞ大和だましあるものい

死べき時の今なるぞ。人よかくれて恥かくを
 敵の亡ぶる夫までいそめや進めもろともよ
 玉ちる劔ぬき連て死ぬる覺悟で進むべし
 前を望めむ劔なり。右も左も皆劔
 つるぎの山よ登るのい。未來のことと聞つるよ
 此世よ於てまのあたり劔の山よ登るのも
 我身のなせる罪業をふろほすためふ非ずして
 賊を征伐するがため劔の山も何のその
 敵の亡ぶる夫まで進めや進め諸共よ
 玉ちる劔ぬきつれて死ぬる覺悟で進むべし
 劔の光りひらめくは雲間よ見ゆる稻妻ぞ

五卅
 四方よ打出を砲聲の天よどどろく雷を
 敵の刃よ伏せものや丸よ碎けて玉の緒の
 絶へていかかく死する身は屍の積て山をさし
 其血の流きて川をさす死地よ入るれも君の爲め
 敵に亡ぶる夫まで進めや進め諸共に
 玉ちる劔ぬきつれて死ぬる覺悟でもむべし
 彈丸雨飛の間にも二ツをさ身をかままづよ
 進む我身の野嵐よ吹かれて消る白露の
 はかなき最後とぐるとも忠義の爲めよ死ぬる身の
 死して甲斐ある者あれば死ぬるも更よ怨みを
 我と思ひん人達の。一步も後へ引く勿れ

敵の亡ぶる夫までい進めや進め諸共よ
 玉ちる劔ぬきつきて死ぬる覺悟で進むべし
 我今爰に死ぬる君のためあり國の爲
 捨つべきもれに命ありたとひ屍に朽るとも
 忠義のためこそてし身れ名に芳えしく後の世よ
 永く傳へて残るらん武士と生れた甲斐もなく
 幾もあき犬と云はるゝる卑怯な者とせしられな
 敵の亡ぶる夫まで進めや進め諸共よ
 玉ちる劔ぬきつきて死ぬる覺悟で進むべし

●花月の歌

小室弘作

月と花とい昔より誰が樂まぬ人である

たがよろこむぬ人であるさびさりながら月花も
 心よつきてうきことの種とされるも多からん
 足柄山の風をぞく松風よそう簫の音も
 これより遠く奥州へいくさやいへむ身の末に
 死ぬか生るか白河の關をむ雲や隔つらん
 勿来の關の春のくれ駒をとめて眺むまむ
 都の空に花ぐもり鎧の袖に散かゝる
 櫻の雪に將軍の鬢の霜より尚白し
 戦の枕に夜に慣れて秋のあわれも知らざまむど
 越山の月のいと白く雲間を渡る鴈が音も
 故郷の空にかへるぞと思へば我もあつかま

花の都にあきて、何處が我身のおきとある
 今宵一夜の宿頼む。櫻の露は袖ぬれて
 滅亡爰にきりまりて。平家の末を悲去けき
 佞人らばの讒により。諫めの言は容れらまは
 二人ともなき賢臣は。筑紫の浦のこびすまひ
 御衣を拜して涙なる。心の底に如何ならん
 我君今の賊のため。遠き島ぢお行玉ふ
 無念の心やるせ。かく十字をけるも。櫻の木
 我が赤心を申さん。に杯か多言を要まべき
 月の光や花の香や。幾萬年を経るとても
 更ふかこりいなを。宛あるふ常なきもの。に世の治亂

月を見て酔ひ花を見て。睡まる春の手枕の
 只一場の夢の間。うつる興廢存亡の
 世のかり行ど無常なき。若しも世運の拙かくて
 上よの君を煩ひし。下ふの民お苦勞させ
 國は亂るゝその時。月は光にかゝやくも
 花は色香におほふとも。おどたれ。みれあるべ死ど
 さきば世間は諸ひとよ。今よりまごゝろ引起し
 國の光を東海の月。よりも尚輝かし
 國のほまきをえよしの。花よりも尚芳ばしく
 するこそ今のつとめ。なり誓て斯えおせし。後
 樂し死月をして見たや。樂しき花見を去て見たや

●ウルゼー

山仙士

おさらばさらばいざさらむ再ひ會ひぬ暇乞ひ
榮譽も長く別るべし人の習ひ皆都て

利運の端の芽出しなば八重ふ花咲き花盛り

位も位重りて榮耀榮華を極むれば

愚を胸お思ふ様運命強く望みかあひ

天ふえ登る龍なると悦びいさむをろあさよ

冬や、深く置く霜の情け用捨も荒野原

根までを枯す霜枯ふ運極ひまりて身れ墮落

見るもあわれな有様なり我が今日の身の上ぞ

永の年月心をく名譽の海ふ濟べるなり

板子を頼みうかくと遊ぐ子童も異らす

丈の立たざる淵も入り飽まで強き我が意地も

堪へおふせす張り裂けて勞れいてたる精神も

忠を盡して年寄れる其の甲斐もあく今にや

身の零落も涙川水屑とこころ成るべけれ

浮世の虚飾も譽れ程思むべきもれにあらすかし

今に至りて我が胸に初めて悟る所あり

廣き世界の其内で王者の機嫌取り取りよ

此世を渡る男ほど憐むべきにあらざり

願ふ所の其笑顔恐る所の其不興

彼と是との氣がねして憂き恐怖の數々の

軍をるより尚ほ多し女子は機嫌取るは増を
遂に零落する時に天よを落るルシフアあり
再び浮ぶ瀬にあらす

評曰字々悲壯巧模寫寵臣末路之真境身無才藝徒
恃君寵以弄威福者足以爲誠矣

○鎌倉の大佛は詣て、感あり

尚 今 居士

今を去ること數ふれば六百年のそのむかえ
建長のころに鎌倉に稻多野局のたてられし
總青堂の大佛の御身の丈けも五丈にて
相好いと、圓滿し見者無厭に尊容の

何きの地ふも此類をさるは明應四年とを
由井のつちをこれ難ふより大殿破壊の其後の
紫磨金仙も雨はぬれ風に暴されたまふこと
殆と爰は四百年このおれ人ふ聞くところ
余も此頃鎌倉の古跡たづねておちおちと
杖をひきつゝ大佛に詣て、心おちつけて
まかと尊顔見あぐればはち中の花もおよびあき
浄き如來の御心の外ふあらわれ何となく
涅槃てふ語の思ひれて凡夫不覺の余とても
まばしの間胸の雲にれて無明の夢の醒め
真如は月は圓かある影を見たるふあらねども

見たるが如き心地せり。夫も物事此なりたちの
 頃よとのふふとどなき。むかゝ羅馬の帝國の
 シーサルひとり智を震ひ起りしものふあらずか志
 徳川氏の繁昌の。家康ひとり徳ありて
 成りしものとな思ひぞよ。時勢人情やうやくふ
 はおびて此ふ至りてた。鎌倉山の大佛も
 浮屠氏の教にあり。来て。千百年余を過ぎし後
 人の信仰厚くなり。鑄物の術も具わりて
 初めてなりまものならん。稻多野局の時代よの
 此大佛よ打向ひ。精神こめて手と合せ
 天下泰平安穩と。己が後生とを禱れどえ

今の明治の聖代よ。生きたる人の然らせず
 佛の面をうち眺め。むろりのことを思ひやり
 そのあるもの師の巧みなる。あさを譽むるの外に
 かこれば變る時勢かな。秋の空ふも劣るまに
 昔の人の是とをせし。事も今での非とどなる
 今日のことよ明日のうそ。あすの教にあさつての
 非理邪道とやなる。あらん天地萬物一定の
 規律よよりて進化すと。學者はいへど是を之れ
 志かど心よ認めたる。人の果してなるらん
 嗚呼盛なる大佛よ六百年もたはた川
 からくれさいのもみじ葉と。流る、水を年々に



人の譽ることならず。尊体こゝに在ます間
如何は時勢のかゝるとも。年々人の尋ね来て
歎賞せざることをけん

新体詩歌第一集

竹内節編輯

新体詩歌第二集

勸學の詩

矢田部良吉

昔一唐士の朱文公
わが學問をすゝめんと
一生涯に春に夜に
よ一博學の大人ながら
少年易者の詩を作り
夢に如しと嘆きけり

國に東西世の古今
學の道に就くもの
同一多少の感慨を
人比高卑を問ひて
いかよ才能ありとて
起すぬとのあるべし

春は初花秋は月

夏のみどり葉冬の雪

都て此世の物事よ

心をとむる時あらむ

まが學藝を省りみて

過る月日を思ふべし

池のまぎらの森草の

みどかき夢を覺ぬまよ

軒端は茂るさりの葉の

吹く秋風にさそわれど

此年も半は過ぬるを

文讀む人は志らすやの

年の月日と長けれど

難波入江の村ありを

ひとよの如く思はれて

我身の上のはづかまき

螢や雪の光りよて

文は讀めども業ならず

昔の人の學問の

唯一まぢの道なきと

なほ賢人の嘆きあり

今の學術多端ふて

枝よ小枝よ末葉まで

いかて凡夫の能すへき

さは云ふもは、證に

山のそとにめの一塊土

海の初めのひとづく

いかに急げど詮なき

心をこめていつまでも

怠らぬこそよかりけれ

たとひ多くは渡らぬも

唯一藝を修めなば

身の爲とふる多からん
蜂は能あり蜜つくる

蜘蛛は藝あり網をりり
何とて蟲は及ばざる

勉め勉めよたゆみなく
難き事として厭ふなよ
教は山ふしをりあり

進み進めよよどみなく
學の海は舟路あり
丈夫何か怯るべき

春夏秋冬の詩

矢田部良吉

此詩の句尾の二字を以て二句づ、韻を踏みたるものあり例へば「よるこばし」暖かしの如し

春の物事よろこばし
庭の櫻や桃のいろを
野邊の雲雀はいと高く

吹く風とても暖かし
よよ美しく見ゆるかを
雪井送かよ舞ひて鳴く

夏の水草の葉も茂り
夕暮かけて飛ぶ蟲の
人の我家を立出で、

百日紅も咲きよるり
集まり来る軒のまの
猶涼むらんさよふけて

秋の尾花をみおへし
晴れて雲なき青空よ
さきど何處も同じこと

桔梗の花も開くべし
照らさ月形明かよ
寂しく見ゆる家の外

冬の雪霜いと深く
おさん爲として爐火いろりいよ
風の吹入る戸のあいのい

冷ゆる手足を暖く
近く團居まごゐをまゐる時よ
外の方見まごゐまは銀世界

●カムプベル氏英國海軍の詩

矢田部良吉

イギリス國の海岸を
一千年のそのあひだ
戦争のみか嵐あらしをも
敵を受く共たゆみなく

固く守れる水兵よ
汝が建つる大旗の
支へ得たまは此後も
勇氣の限りひるがへせ

軍烈しくあらばあま

嵐も強く吹かば吹け

立ちくる海の浪間より
汝を扶けたまふべし
其甲板いしのてがらの場
大手ルソンのアレーキの
軍烈しくあらばあま
四方海なるアリタニヤ
山とたちくる波としても
慣れて我家は異ならず
船より放ち轟かす

汝が祖先あらはれて
蓋し祖先の軍艦の
大海原の其墓場
死よし處の人のぶ
嵐も強く吹かばふけ
とりでも城も用いおし
千尋のそこも淵としても
いかづちおせる大砲を
波を己けつゝ進み行く

軍烈しくあらばあま

嵐も強く吹かば吹け

國の光とたてし旗

益光りわ、みやきて

危難も都て解け去りて

太平の日よもどるらん

其時汝つもの、

いさほし譽めて諸人が

歌よ唱ひて悦ひて

安榮限りあかるらん

烈しき軍をみし時

強き嵐しのもやみし時

○シヤール、ドレア、ン氏春の詩

春の景色の、どけさを

いかで好まぬ人あらん

冬の物事さびしきも

春の心のをのづから

とけて樂み限みあし

雪も、どきもふる雨も

人をなやまきとぞあま

のどけき春の来る時は

北風強く吹く冬の

野邊よは深雪木は氷柱

雨もおほりていと寒く

障子よをまを建廻りし

爐火近く團居あて

ねぐらの鳥よとならず

されど嵐も雪を歌む

のどけき春の来る時は

曇りがちなる春は空

日影もうましく晝くらし

去と春よもなりぬれば

喜ばしくも雲はれて

光りれどけき天を見る

いぶせく降りて雪霜の

跡も残らず消へうせぬ

のどけき春の来る時の

西詩和譯

坪井正五郎

息れ出入せかだの血
清きたましひくれ命
遠よ變る針の位置
なきの則ち無能無智
よき働さを爲せる後

志かのみならず宜心地
時計のめぐり早くたち
歳はすぐとも業とさち
多く考へ氣をたもち
長しと言はんおれ命ち

井上巽軒曰押韻自在可喜又曰學者曰誦之以自勗
則其進步可期而竣也

刺客を詠むる詩

大學のいかせたちのものせられたる新體詩
抄れ體ふ倣ふ
八門奇者

天を仰げばいと廣し。地見わたまも亦廣し。その中よ
住む人よして。ことか心れ狭かりを狭き心の一節よ。
此の人有らば世の爲よ。ゆるしき事や起らんと。思ひ
こびけん朝夕よ。やがて病よがこつけて。勉めしこぎ
も打棄て。時の花散る春風れ。なごやの里よ歸り来て。
それと言いぬど父母よ。是ぞ此の世のお別よ。厚き惠
も報い得ず先だつ罪の免してよ。うからはらから友
がきよ告げんとまれど告げがてよ。おもひ煩ひかき
残を心の盡さず執る筆に。今日春雨れふる里も。たや
たち出る旅ごろも頃も經ずして稻葉山ふもとよ着
きぬ嬉しくも識る人としてはあがら川おもふかた死

一あふ瀬をば尋ね問ふべきよしもがな。とく揮まひ
 しこの白刃憎さも憎しかのかたき。非ぬ望みを胸に
 かき下なる民をそゝのかし。上の控を言ひあばき。上
 を崇むる人をしも護ふものと説きども下よへつら
 ひ民よこびねぢけいでたる彼等ども。佐賀よ起りし
 箭さけびも長門に降りし火の雨も。薩摩の瀬戸よ幾
 千々の人を沈めし浪風も。うたてくはあきど君がた
 め高麗もろおまも討鎮め。國のみいつを振はんと。思
 ふ餘りの其の結句憎むべしとも覺ゆれど。思ひかへ
 せば可惜ひと。是ふ引さかへ彼れとも。世の正道を
 亂さんと彼れ蠢けき佛蘭西の血の波たちし禍津世

の首斬り臺よ國王を。ひさすへたりし當時のいと淺
 ましくふるまへるあとよ心やとまりぬる。口をひら
 けは鮮血もて世を洗ひんと叫ぶなる。かゝる勢ひつ
 のりなは危からまし大君は。いで大君は御爲し斬り
 斃してん彼の人の。さしきりながら彼の人の誠にか
 くも思へるか。付き従へるえせものゝ。妄よしかひい
 ふあるかと。ふもかくよも彼の人の心の底を知らん
 ぞの願ひが。おひてまのあたり。えんぜつ聞しその時
 の心の中いいか。ちりし。今いをこしも。宥さきと隠し
 持ちたるし。首袖の裏よて。抜き放し。待つといさらよ
 彼れ人の神ならぬ身の思ひね。鼻高らかし。づし

づ。跡より飛びつけば何故ありてかくまると。
 言のせも果てむ何故と問ふに愚よ汝こそ。今將采の
 國賊と閃く刃ほとはしる血。ほも赤た心ある。此の
 ままをの真心に貫かざるぞ怨みなるよ。やうら
 みの遺るともをほき其の名に世の人もふまよしる
 して音高く語りつぎなん千世までも。されど敵と見
 ひがめし其の紳士の世よためし。まくな死までよあ
 つかりた君よ忠をるこ、ろざし。國よつくせるこ、
 ろざし。

●外交の歌

屈山居士作

西に英吉利北に魯西亞油断を爲せそ國の人外表よ
 結ぶ條約も心の底に測かれむ。萬國公法ありとして
 もいざ事あらば腕力の強弱肉を争ふに覺悟の前の
 とあるぞ嗚呼同胞の兄弟よ。御國よ生れし甲斐あら
 ば盡せや勵め諸共よ。まこゝろ込てつくまべし

●俊基朝臣東下

落花の雪に路み迷ふ片野の春の櫻狩り。楓の錦を着
 て歸る嵐の山の秋の暮。一夜をあかき程だよも。旅寝
 とおれはものうきよ。恩愛のちざり淺からず。我が故
 里の妻子をば行衛も知らず思ひおき歳久しくも住

みをなれし。九重の帝都をば。今を限りと顧みて。思ひぬ
 旅より出て給ふ。心のうちぞあはれきあり。うきをば留め
 ぬ。逢坂に關の清水。袖ぬれて。末に山路を打ち出
 の濱の沖を遙か。見渡せば。汐からぬ海。おこがれゆ
 く。身をうきふね。はうき沈み。駒を轟ろとふみ。ならを。
 瀬田の長橋。打ち渡り行き。かふ人よ。近江路也。世の畔
 の野。お啼く鶴も。子を思ふ。かと哀れなる時雨も。いた
 く。森山の木の下露。お袖ぬれて。風お露ちる。篠原也。篠
 こける道。すぎ行けば。鏡の山にあり。とても。涙おくれ
 て。見分たす物。の思は。夜の間。おも。老蘇の森の下草。お
 駒をと、めてかへり見る。故里くも。隔つらん。番場

鮫ヶ江。柏原不破の關屋に。あれはて。猶漏るもの。に
 簷の雨。いつ。お我身の尾張。ある。熱田の八紘。ふし。おか
 み。潮干。お今也。鳴海瀉。傾く。月お道見。江て。明ぬ。暮れぬ
 と行く道。の。人相なれば。今はとて。池田の宿。お着き給
 ふ。元暦元年の頃。と。か。重。衛。中。將。東。夷。の。爲。め。捕。れ
 て。此の宿。お着き給ひ。し。お。

東路の羽生の小屋のいふせきお

古里いかに戀しかるらん

と長者は。娘が讀みたりし。その古の。あはれまで。思ひ
 殘さん。涙なりける。旅館の燈。幽ふして。鶏鳴曉を催せ
 ば。四馬風。お嘶いて。天龍川を。うち渡り。さよの中山。越

江行けば。白雲道をうづこ来て。そおも知らぬ夕暮
の家郷の天を望みても。昔し西行法師が命なりけり
と詠つつ、再び戀し跡までもうらやましくぞ思ひ
れざる隙行く駒れ足早き。日既ふ乎午に近けき。登
餉する程とて。輿を庭前よかろし。長柄を叩て警護の
武士を近づけ。宿の名を問ひ給ふ。菊川と申をあり
と答へければ。承久合戦のとき。院前よ書きたりし。各
ふ依り。光親關東よ召し下されし。是の宿よて誅せ
られしとき。

昔南陽縣菊水酌下流廷齡

今東海道菊川宿西岸終命

とかきをりし。遠き昔の筆れ跡。今の我身の上になり。
あはれやいと、勝りけん。一首の歌を詠して。宿に柱
よかけらまける。

いよしへも斯るためしを菊川の

同じなるがれし身をや沈めん

●故里の益子が許より蘭よ長歌とへて

ねこされけきば 藤田東湖

數ふればはや二とせの旅枕。おどろかれよし秋風も
おとしのさをが聞きなれて。うきとも知らず白雲の
棚引く間より。もる月の。かげも隅田の夕へをを獨り
ながむる蓬生ふふる里人のねとづれて。いとめづら

しき藤華明石も須磨もあき庭ふ時一忘れて咲きよ
ほふなきが色香を言は葉よそへてはるくおこせ
よ一深さをさけ杯にうけて酌みつゝ敷嶋のやま
とのみかひ海原のよそなる國のことまでも思ひ渡
せば世の中のつらさためしも人の身のふさぬ事
もありそうみ濱の真砂のかすよりもおほさぬれ
ば君が爲めうづもるゝ身のなふは瀉あーのふしき
へ中くよよともいぬん秋の夜の旅のあわれも
ふる里の春に逢ひぬる心地とやいはん

○小督の歌

牡鹿おく此の山里とゑいどけん嵯峨のあたりの秋
の頃ちくさの花もさまくゝ虫の恨みも深乾よの
月よまつ虫招く尾花萩よは露の玉虫やそよぐを
ぎ虫くつゝ虫啼音よつきて中國が寮の御馬たまに
りて空のゑをぐたの藤袴たづるぬ人のおそかけふ
たつ薄霧の女郎花をれかあらぬかまぼろしの逢が
島根たづねこび駒引とむる篠のくま息ふらげの松
風ふかよふつまおとつまおひのねによる鹿ふあら
ねども昔一覺ゆるふゑ竹や合をしらべのまがひな
たおゑをしるべよ一たひよる嵯峨れの興のうたを
り戸想天戀の唱歌に比翼の翅の雲井を越へ盤渉調ばんせつてう

のしたべの松に連理の枝にかよふ小督の局。世を忍ぶをみかも。明日の大原よかへん姿のおごりとてよ。いよ手習すつまごとれ。いよこを思ひせさかねて。涙よ袖をかゝりむや。人目も如何あやめがた。糸の色音を。あるべにて。さし入月の雲井より。御使よまへりし。とかまき君が。詔り野べのをちかた。己けきつゝ露の玉章さしよする。つまどのはしれ縁に綱又ひき結ぶ。御還どりと。そへて給はるいつゝ衣さぬく送る。ほども無く迎への車。たてまつり音よかへる百敷や。く千代を契りの松のことれは。

●東の花

吉野よく見し人の不知花の東まの隅田川よよぬ。春のひとりどやみやどり事問ひし昔よみおす。渡し守春に暇無くみおれさほ。指して堤を行た通ふ人の袂のあけみどり。柳の絲よ引かれ来て。長さ日暮らし花の香を袖ふしめてゆくみかひ遊び戯まつたをやめの歌ふ一トふしゆみならば残らじ袖のうつる香を如何み定めむ咲さよほふ。花の手枕ら夢をらでかいをもあだの花の影。流石嬉しきゆかりも紫ささかふる。武藏野の廣を恵みや仰ぐらん。尚行末も千代八千代。長さ堤の花櫻ら榮へ榮へん。御代の春

●長恨歌

今の昔一唐一色をおもんじ玉ひける帝。おのしま
 せしとき揚家此娘め。かしくも君も召れて朝さく
 是の御寵をあさからず常にかたいらふ侍りぬ。宮の
 内のをや女三千の寵愛も己が身ひとつの春の花。
 ちりていろ香も亡。魂のありかを尋ねるをさざほ
 さしてはるく行舟。法士は涙のうさねを常
 世の國ふ来て見れば樓閣玲瓏として五雲おこり。う
 ちよをまめく女の童こととすぐれて玉真のすがた
 にいづれ。李花の一枝あめを帯びたる其の氣ひ見
 るよりそれとことのも涙おほれて欄干をひたを

もいかよなれ深し。驪山の昔一思ひやるあらなつか
 一の都人はづかしかがら在一夜の其のむつごとも
 消へえつる露のちざりのうさゆらし云ふてよよな
 らひとかたし御思召すかや。深さ江よ春の氷の薄死
 しいやよ思ひ逢ふよ。うちとけて寐みだれ髪を其
 れまよとりつくろぬ女死をかあわがらんせか
 らまばの色よ此の身を深め糸の結びめかあ死かた
 らひと縁つさぬればいたづらよまたおの嶋おかへ
 りきて尚をつか。古へを思ひいづればあはれな
 る驚破霓裳羽衣の曲まれふぞかへす乙女子がまれ
 よぞかへす乙女子が袖うちふりし心し星さやさる

よても君よ此の世。あひみんことえ。よもぎが島は
 どぞうきよなきども。戀しやむかひ戀しや昔の物
 がありつくさば月日もうつりまひの。あるのかん
 さしたまはりて。都ふかへる家づとにふみよもさ
 るふみ月の七日のよの私語ひよくれんりもいま
 にはやかましくありし。うさちざり。天のとあいのあ
 へなるもつちの久しく。ふりぬるもつくとときあり。
 此の恨み歸々浪々としてたゑまなく。今よのおせし
 筆のあと

●櫻がり

長閑ふる頃もささらぎ。おしなべて見よとま山えう

ちけむり柳のいと。あさみどり春のよしきかあや
 おくも都よりらぬ。あらくものたてるやしるべ。櫻狩
 り人のこゝろえ。あこかるゝ。そらを見すて、あしぢ
 おのまつらむものを行鷹の。かほるゝ翼の空ふさ
 へ隣にあえれ。聞ゆなり。行衛したひてたちとまり。
 なこりのしべし。さすきねど初花ぐるまめぐるひの。
 をがへつらねて見すもあらず。見もせぬ人や花の友。
 なるもしらぬも花の影。あひやどして。まがれねの。
 長靴春日もいたづらふ。日影をぞして花ごろも。おれ
 したもとの香よそみて。野邊も山べも花ゆへおいた
 らぬくまのなけれとも。山のやまのいなねをとめて

落る千すぢ白らまぢ。佐保姫の手びき糸の。たれな
くの手折てゆかんいそあひの鐘よりさきよ。春霞た
ちあかくそ風吹とも。

芙蓉を詠むる歌

ましろあるたか根もゆるい。さくら花さくやひめと
のかみよの古し。神代も花のいろさかり花のすがた
のいといらし。まんどいといらし。いとまかこき人
のよまふしもまぐある竹取の翁のむせめいよむ
まめみがきたてたるかつらのまゆまかほりてりそ
ふ秋のよの月まかこちてふるさとを戀ひーがるや
つしたふやつやつとやつとを指折見れむ。二八十六

でふこたまづさを鴈が持てくる雲井よりちらと觀
せたの冬たつ天そら降り来る雪のはだいまんこれ觀
よがしよ三保の松羽衣もといふ。迷言まよかけた天津乙
女のういさのあだかをとこひてり。此の年月をい
づがふせや。假り枕ら糸も操まひはたをいーくよ。
寛裳羽衣げのまやうの曲をか。東まあそびの駿河舞雨あまようる
ほふ花の袖かへきたもとふ。充満の賢らを普ねく世
ふふらせ施こしたまふいつくし。み盡ぬそのなる。蓬
菜の山又茲ふ富士のねの扇の裾野。末糸廣き御國の
要めと祝しけり。

西行の歌

己れもむかしのまほらを此真弓つぎ弓としをへて
 引きたがへたる朝さ夕の命ちありけり。旅衣こけの
 衣。身をそめかへて心のちりの袖はらふ。やほあせ
 かいふいとごのいとしかあいの昔しのことよの
 よしの山。こどのしをりの道かへて。まだ観ぬ花の色
 ををたづねく。うた枕ふでのまさみれ。墨深櫻う
 つろふ春の花のかほ。やせるまかたふかさきたなり
 を水の鏡ふかげとめて。いばし立よる柳かげ。

新体詩歌第二集終

新体詩歌第三集序

和歌裨於世教。漢詩亦益於德化也。明矣。然而非入其道
 熟之。則吟之詠之。其感情猶與雜僧誦經一般而已。夫俚
 歌俗謠。童幼婦女。好而誦之者。所謂雖鄭聲導情欲之所
 致。亦是解之易也矣。曩者學友竹内氏。有新體詩歌第一
 第二集之編。今又以所輯第三集。示余受而誦之。其語不
 高。其調不卑。苟通。僅々普通之文字者。悉得誦之。解其意
 也。而句々慷慨盡忠。章々友愛貞節。使其感動人心也。深
 矣。余謂。以此詩歌。易彼俚歌俗謠。令人々誦之。其則志氣
 自昌。其情性自和。而遂移風易俗。亦非難也。因聊記之。以
 表感情之一端云爾。

明治十六年癸未三月上浣

雨軒 坂部 識

新体詩歌第三集

坂部 廣貫 校閱
竹内 節 編纂

左社詩ハ一千八百五十四年英佛の兩國土耳斯を
授けて魯西亞と兵端を開き遂に高名あるクライ
ミヤの戦争となり此間數多の合戦此處彼處に在
りたる中最有名なるも同年六月廿五日バラ
クラバの戦争にて英國の輕騎兵六百騎が目餘
る敵の大軍中へ乗り込み古今兵双の手柄を顯わ
したれとも惜い哉衆寡素より敵に難く其大概ハ
討死、或ハ擒せらる無難に陣したる者甚僅

ふて有きと當時英國ふ有なる詩人テニソン氏
が其進撃に有様を吟詠したる者として何國人か
限らむ苟も英語を解するも此詩を暗誦せざる
なるといふ

山仙士

テニソン氏輕騎隊進撃に詩

其一

一里半あり一里半 並ひて進む一里半
死地は乗り入る六百騎 將の掛けの令下を
士卒ある身の身を以て 譯を糾すは分ならず
答をなまも分ならず おき命おれは従ひて

死ぬるの外に有ざらん

死地は乗り入る六百騎

其二

右を望めは 大筒ぞ 前も左りも又筒ぞ
共ふ打出を 砲聲は 天に轟くいかつちの
響の如く 凄まじく 彈丸雨飛の間よも
猛り立てそ 進むある 死地にてそ入れ鱗の口
勇んで 乗り入る 六百騎

其三

抜けば 玉ちる刃を 皆諸共は 振あげて
きら／＼と 輝けり 敵陣近く 乗り掛けて
大砲方を おで切りを 最々目冷しき 働きを

煙の中は飛込みて
太刀の早業見事なり
遂にさゝふる事おらま
馬の頭を立直ま
残るはいと、僅かあり

其四

右を望める大筒ぞ
共ふ打出を砲聲の
彈丸雨飛の其中は
死地より出て乗り歸を
歸るは元の一里半

残るはいと、僅かあり

其五

あゝ勇ましき武士の
手柄は永く傳へなん
とる年あまた重なりて
頭に霜を戴きて
六百人の豪傑が
其古事を語りな

○朝親お花よ寄せて學童を奨励す

庭のかたねの朝かぶよ

烈しく陣を破るあり
敵の軍勢たちくと
群くばつとむら崩れ
以前お進みし六百騎

左りも後も又筒ぞ
天は轟くいかつちそ
縦横むとん切り靡く
鰐の口より腕を出て
六百人の其中で

世は香しき其譽
今のをさなご生立ちて
腰の梓の弓となり
孫彦やいやこ多き時
敵の陣へと乗り入れる
末代までも名の朽ち

小川健次郎

朝おくかこたらず

咲とも盡ぬ其花の
同ト天地の恵よて
深死心を白露の
人こそ花よ劣るらん
負けず起出て機嫌能
我身の無事を神よ謝し
縁や襖の拭きはらひ
やかて汝の質も花も

色といひ又形までも
我等れ目をは慰さむる
干をも知て寐くたる、
學ひの兒よ此花よ
貌打洗ひ父母と
庭の面のりき掃除
怠らぬやう川とめよ
此朝顔ふもまさるべし

庭れかきねの朝かぶの
咲たる花の其色に

朝をくよ咲理由や
白といひ又赤青と

五十八
異なる原因や其外よ
心理の法や白露は
人あそ人の甲斐あるれ
疑ふからば躊躇せず
精神論や物理学
化醇の律をあきらめて
幾春秋の年月を
今を蒼の汝の身
勤めて徒ふ過死るるよ
蒼に似たる學の兒

我等の目をば慰さむる
結ふ作用をこらて過く
學ひは兒よ此問を
普通の學を疾く課へて
夫から夫と研究し
學士哲士と呼ばれたら
樂しき中に送る可し
露の散る間も怠らむ
花よよく似た蒼れ兒

●題秋 (西討和譯)

望月秋太郎

早やさしけり秋の影
そよ吹く風ふ翻かへり
苔のあからまのよ深き
賤れ小家の静けさ
浮世の塵をよそ見る
時つく遠き鐘れ聲

庭の木の葉の散くくと
草屋を圍む垣の面の
千ひらの金ふ勝るなり
此かくき家は聞ゆるに

夏は縁りも消へはて、
谷は水際に咲き残る
色いとさめて衰れあり

山々深し秋れ色
小草の花の紫も

秋の景色とあるは川れ
谷間を越て諸共ふ
黄昏時よなるまでも

時の来ふけり去年迄の
登り遊ひしあの山に

今已き爰は唯ひとり
移り傾く日れ影に
猶ほ幻し見ゆるなり

待てとも更に聲にせで
健く効なき面さしの

移りきへ行く夕日影
西の山端のくきあひの

獨り佇む戸の外ふ
色もいつか消うせて

黄昏暗くなるまでも

● ロングフエロー氏人生の詩

山 仙 士

そも靈魂の眠るの
人の一生夢なりと
眠らふや夢に見ぬ者ぞ
夢と思へど左はあらず

死ぬと云べき者ぞかし
哀きをふして歌ふをよ
此世の事の何事も

人れ一生夢あらず
人れ終の墓あくも
土より来り又土よ

最と慥かなる事ぞかし
墓は埋まるものならず
歸ると云ふは肉體ぞ

そりや靈魂の事ならず

此世ふ在りて樂むも
世は有趣意は有ざらん
日毎くは怠らむ
功を立ねばあらぬぞよ

又苦しむも固と人の
生るは役は立つ為ぞ
今日の今日文け一日の

光陰實は箭の如く
心の如何は猛くとも
送葬太鼓打つ胸は
最とも衰きは響くらん

藝道最とも易からず
墓はく進む葬禮の
音止めされたる太鼓の音

此世の中を戦争ぞ
人よ生きた甲斐もなく
あゆむ羊や牛たるを
功名手柄をまべきぞ

其戦争の中は居て
人よ使ひま進められつゝ
人よ劣らず憤發し

如何ふ樂あと思ふとも
如何ふ嬉しく有つる共
働くへきの現在ぞ
胸の心を天に神

未来にあておま可らず
過去の昔にお過し事
其働を見る者の

豪傑輩の一生を
生きて甲斐なき者成ぞ
稀なる譽得るをあらむ
永く傳へて残るらん

熟ら思ひめぐらせの
人に勝れぬ手柄して
名は香しく後の世に

其香しき名を聞かむ
艱難辛苦の浪風お
助け船さへあらぬ身を
功名遂ぐる者あらん

社會の海に乗り出して
吹廻はさきて破船して
氣を取り直し憤發し

さきむ人々怠たるを

暫時に猶豫するをかれ

運命如何よつたあきも
撓まを止まず自若と
勤め働くことをせよ

心を落をとかかき
功名手柄な一川、も

● ロングアエロー氏兒童の詩

尚 今 居 士

来きこらぬべ傍ららよ
我等か多年苦まて
忽ち解けて露ほどの
汝が遊ひたぬる、を

汝が遊ふさま見せぬ
おほとるさり！疑ぬ
曇りも胸よ止まらむ
見るに恰も東ある

窓打あけて日に向ひ
清く流る、川水よ

さへづる鳥の聲聞て
臨むが如た心地せり

流る、水も鳥の音も
心の如くゆたかなり
かなし秋も過去りて

照らすあきひも汝等の
されど我等の心中は
寒き雪霜ふりふけり

童えべ無くば世の中の
童いべ無くば我くぬ
前を望むもうばたまの

如何よ苦し秋とならん
後ふり向も憂さぬかり
闇の夜中ふ異おらす

知らずや茂る森の木は
清れた空氣や日の光
善れた汁液を造り成し

いや美いしき緑り葉は
其作用を施して
幹や枝とを養ふを

知まよ開けた氣候をば
幹にはあらで軟かき
森を此世ふたやふまむ

うけて早くも感するは
緑れ葉よてありぬるを
葉は童のべよ比ふべし

来れ童のべかたのらに
花よ戯ま啼く鳥も
如何なる事を告るやを

れどけた天を吹く風も
汝が清きお、ろよ
我耳近くき、やけよ

思慮を巡らし智を竭し
我等が書ける文としても
汝が面の樂しきよ

我等が成せる業としても
汝が様のかはゆきよ
比ふるそのあるべきや

人の賞はる詩や歌は
完全無虧の汝等よ
汝の生ける詩歌なり

世に數多くあるなれど
及ふへき者あらずか
他は皆死し言葉のみ

●社會學の原理に題す

山 仙 士

宇宙の事の彼是の

別を論せず諸共よ

規律の無き有ぬか
微か見ゆる星とて
云へる力のある故
又定まれる法あり
且天体の歴廻する
必き定まりあるもの
地震の如く亂暴
一に定まれる法あり
地をはふ虫や四足
其組織より動作まで
又万物は皆共に

天は懸ける日月
動くに共ふ引力と
其引力の働に
猥り引ける者ならず
行道とて同ト
又雨風や雷
外面に見ゆる者とて
野山は生ふる草木
空翔けりゆく鳥類も
都て規律のあるもの
深き由来と變遷の

あらざる物の無どか
別を論ぜを諸共
遺傳の法で子傳へ
適せぬものは衰へて
桔梗かるや女郎花
牡丹ふ緑の唐獅
木の間に轉る鶯
雲井は名のる杜鵑
友を慕ひて興山
諱も分らで貝の音
羊は近死後はまだ

鳥けだものや草木の
親に備はる性質の
適するものは榮へゆ
適の世界に在るもの
梅や櫻や萩牡丹
菜の葉は止まる蝶々
門邊はあさる知更鳥
同ト友をば呼子鳥
紅葉ふまけ啼く鹿
追われてあゆむ牛羊
愚なるとよ萬物の

靈とも云へる人とても
元を質せむ一様ふ
積み重なる結果どと
見極めたるは是どおれ
優をも劣らぬ脳力の
是ふら劣ぬスベンセル
化醇の法を進むれは
動物而已ふあらむして
活物死物夫而已か
區別は更ふあかむを
感ずるも尚ほ餘りあり

今の體も腦力も
一代増ふ少くづゝ
今古無双の潤眼で
アウストリトル・コウトン
グルワネン氏の發明ど
同ト道理を擴張し
まのあたりみる草木や
凡そ有とあるものは
有形無形夫れくの
真理極めし其知識
されば心の働も

思想智識の發達も
社會の事も皆都て
既よものせる哲學の
生物學の原理やら
土臺となして今更に
書ふものさるゝ最中ど
そも社會とい何ものぞ
其結構よ作用よ
種族と親と其子等の
男女の中の交際や
取扱の異同やら

言語宗旨の改良も
同表理合のものなれば
原理の論ど之ふ次ぐ
心理の學れ原理をば
社會の學の原理をむ
此書よ載て説かるゝに
其發達の如何なるぞ
社會の種類何なるや
利害の異同如何なるや
女子ふ子供の有様や
種々なる政府の違ひやら

違ひのる起源因や
其變遷の源因や
智識美術や道德の
遷り變りて化醇をる
論述ありて三卷の
最も目出度美舉ふこそ
讀たる者い誰ありて
實に珍敷し良書を
何から何とせ己をやく
走り書やら空^{から}まやべり
天下の事い一と飲みと

僧侶社會のある故や
儀式工業國言葉
時を場所との異同ふて
其有様を詳細ふ
長さ文ふぞせらるべし
既に出てたる一卷を
此書を褒めぬ者ぞかた
社會の事ふ手を出して
責任重き役人や
舌も廻らぬくせにして
法螺吹き立て利口ぶる

新聞記者や演説家
人をあやめる罪やがの
月日の事や星の事
夫等の事いさて置きて
疊一枚させばやて
長の年月年季入れ
出来る事い有ざるに
年季も入らず學問も
新聞記者や役人と
箇やうを者が多ければ
尚ほ思ろしき虚無黨の

此書を讀て思慮なきは
少しは減りも為からん
動植物や金屬や
凡そ天下の事業い
足袋を一足縫へばとて
寢る眼寐すし習いねむ
獨り社會の事計り
はるに及はぬ譯なれば
成り最と最と易けれど
忽ち國ふ社會黨
起るは鏡よ見る如し

操めよ操めたる其上句
秩序も建たず自由なく
再び浪風静まりて
百年足らず掛らん
有様見ても知られたる
妄に手出しする勿れ
廣き世界の其中よ
盲目同士の戦よ
現びきまらぬ棒打の
今の世界は旋風
烈しき中へつい一寸

虻蜂取らずの丸潰れ
泥海ふこそなるべけき
太平會と成る迄
革命以後の佛蘭西の
そこふ心が付きたらば
妄ふ志やべると勿れ
恐るべきもの多けれど
越したる者に有ぬか
仲間入りおそ危ぶけれ
烈しく旋る時あるぞ
絡さ込まれたら運の盡

足も据はらず眩眩さ
廻く廻くと廻さて
上句のつては空中へ
初て悟る其時に
後悔先きよ立ぬなり
其吹く中へ過ちて
上手とこそいふべき
輿論を誘ふ人たち
能く慎みて輕卒よ

頭のいと、ぐら付まて
秀間も非ず廻りきまて
絡さ上られて落されて
早遅時れ唐椒
颶風烈しく吹く時に
船を入れぬが楫取の
政府の楫を取る者や
社會學をは勉強し
働かぬやう願いや

●遊墨水歌

飯田武郷

隅田川堤の櫻咲みたれ。みたる、盛咲ほひ。匂ふ遠
 近梢ふの雲をかひかゝ木蔭よの雪こそつもれ見渡
 の筑波の山の表霞かきめる空よほのくくと半みへ
 その水上の舟は帆影にはおきて洲を早くいなきて
 目の前よ近付よけりとりよろふ氣色をみれむよる
 波の音ものどけく行水の。かけも静かゝ自心をちる
 ておもしろみ遊ふ此日の暮まもならぬか

皆人の心ひらけて隅田川遊ふ盛りを花もみるらん

●詠和氣公清麻呂歌

久米幹文

八隅去、和期大王の見したまふ御夢のひまよかた
 濁る弓削の川波おほけおく。逆のほらひてあふぎみ

る高坐山は高峯をもひたく汚せの此世の海にやあ
 らむ人皆の魚にやると天の下。なけかふはしよ
 廣幡は八幡の神の神憑り。我國のしも天地の始の
 時の上下に。おとこり正し。くおたふれ穢きものは
 神逐ひ。やらひきて、よ打罰め拂ひそけよとた、
 告よ。のらゝ給へま大御言。いたゝく臣のおほれむ
 事も思ひを沈まむ身をも忘れて畏と歸奏せば。長
 い此夢は覺て惱まゝさみ心うせめ逆巻水速けれ
 と。立騒く波高けれと。大御稜威ふ争をひかねて末
 終にくたり落たり其臣の功の高く其臣の名さへさ
 やけく後世の鏡よせむと稱め給ひ。治めおまひて

神ときへいひ奉らむ事の尊とき
君こそ水の附屍と弓削川に送巻波をたゝ渡りつれ

新体詩歌第三集終

新体詩歌第四集序

余嶰谷竹内氏ト始メテ湘川ノ澦リニ相逢フ同居ス
ル數月タリ一度袂ヲ別ツテヨリ爰ニ三年復ヒ東都
愛宕ノ麓ニ邂逅シ手ヲ握リ膝ヲ交ヘ相語り相問フ
一數刻タリ氏其編スル處ノ詩歌第四集ヲ以テ余ニ
示シ且語テ曰ク凡ソ人喜怒哀樂ノ感情慷慨悲憤ノ
氣焰苟モ其腦裏ニ充溢スル者ハ或ハ是ヲ詩篇ニ漏
ラシ或ハ是ヲ歌章ニ詠シ以テ能ク人心ヲ鼓舞シ又
能乾坤ヲ感動セシムル者古今其例少ナシトセス然
レ氏今我國ノ風俗ヲ見ルニ詩歌ハ殆ント操觚者流
ノ玩物ノ如ク文人墨客ノ一遊戯ノ如ク然リ其之ヲ

爲ス者モ亦徒二月ニ吟シ花ニ咏シ殊更ニ奇語ヲ綴
 リテ雅致ト稱シ人事ヲ離ル、ヲ以テ快樂トナス又
 嘆ナラスヤ又遺憾ナラスヤ今此編ノ如キ其語ハ俗
 其詞ハ易故ニ牧童モ以テ誦スヘク機婦モ以テ讀ミ
 易カルヘキナリ然リ而又其喜怒哀樂ノ情ヲ詠シ慷
 慨悲憤ノ氣焰ヲ漏ス、ハ彼ノ章々文ヲ成シ句々調
 ヲナス漢詩和歌ニ讓ラサルナリト余卷ヲ開キ默讀
 スル數章乃チ鈍筆ヲ舐リ其語ヲ録シ以テ賛成ノ意
 ヲ表ス

明治十六年林鐘下浣

左東都

斗墨柳田識

新体詩歌第四集

竹内 節 編纂

坂部 貫 校閱

我邦ニ於テハ西洋ノ詩歌ヲ翻譯スル人甚タ少ナ
 シ蓋シ其趣向ノ我詩歌ト同シカラサルカ爲メナ
 ルヘシ又適翻譯スル人アルモ之ヲ支那流ノ詩ニ
 模擬スルカ故ニ初學ノ輩ハ解スルヲ能ハス余之
 ヲ慨スル久シ以爲ク西洋人ハ其學術極メテ巧ミ
 ニシテ精粗到ラサル所ナシ其詩歌ニ於テモ亦之
 ト均シク能ク景色ヲ模寫シ人情ヲ穿テ讀賞ス可
 キモノ多シ且ツ其句法萬種ニシテ韻ヲ踏ムモノ

アリ踏マサルモノアリ緩漫ナルモノアリ疾急ナルモノアリ其語勢ノ變化殆ント捉摸ス可カラス而シテ其言語ハ皆ナ平常用フル所ノモノヲ以テシ敢テ他國ノ語ヲ借ラス又千年モ前ニ用ヒシ古語ヲ接カス故ニ三尺ノ童子ト雖モ苟クモ其國語ヲ知ルモノハ詩歌ヲ解スルヲ得ヘシ加之西洋人ハ短キ詩歌ヲ好マサルニハ非サレトモ亦長篇ヲ尚ヒ尋常ノ日本書ノ如キ薄キ冊子ヲ以テスレハ一篇ニシテ十餘冊ニモ上ルモノ少ナシトセス頃口學友某々氏ト相謀リ吾人日常ノ語ヲ用ヒ少シク取捨シテ試ニ西詩ヲ譯出セリ余素ヨリ詞藻ニ

乏シト雖モ既ニ譯シタル所數篇ニ至ルヲ以テ今其一ヲ舉ケテ江湖諸君ノ高覽ニ使ス幸ニ其詞藻ノ野鄙ナルヲ笑フナカレ

尚 今 居 士

●虞禮氏墳上感懷の詩

山々がすみいりあいの 鐘のありつゝ、野の牛の
 徐々歩み歸り行く 耕へす人もうちつかき
 漸やく去りて余とり たそがき時ふ残りけり

四方を望めハ夕暮の 景色のいと、物寂し
 唯この時ふ聞ゆるハ 飛ひ来る蟲の羽の音

遠き牧場のねやよつく

羊の鈴の鳴る響

猶其外に常春藤けき

塔に宿れるふくろふの

近よる人をそかき見て

我巢に寇をなまものと

訴へんや月ふ鳴く

いと哀きよも聲をなり

かまこよた榆又こよ

あら、きの木を生茂る

其下かけようつたかく

苔むを土の覆ひたる

坑に埋まきこれ村の

古人長く打眠る

軒の燕も鶏も

水魂お響く角笛も

朝朗けよそかりぬれ

囂を志くありつれと

冥土の人の眠を

覺きとこそおかりけれ

死たる人果敢なきよ

身を暖むる爐火も

妻のよまへも誰為めを

愛るまらへあかたよ

爺の歸りをよろおひて

小膝よをか事おかり

曾てこれ世に居し時の

麥も小麥も其鎌に

山も畑も其鋤よ

手荒き馬も其鞭よ

繁れる森も其斧よ

任せて君か儘おかり

功名とてても浮雲の

過るか如きものをれ

あゝの古人の世は益と
詫しき妻子の暮しをも

骨折まるも不運をえ
笑ふへきよは非すかし

富貴門閥のみならず
浮世の榮利多けれど
草葉の露もおろかあり

よめ美しくしき乙女子も
いつか無常の風吹か
黄泉よみぢに入るの外をなき

苔に埋きし古人の
餘りまのゆき屋の内に
樂器の音を聞すとも

墓場れ上ふ寺を建て
頌歌の聲よ合をふる
身の不徳とな思ひをよ

ひつき肖像美を盡し
一度ひ絶えし玉れ緒を
諂らふ人のほめ言も

人の尊敬多くとも
繼ぎ留むへき術のな
長き眠の覺すま

考へみれに廢れたる
世よ優きたる量ありて
詩文れ才も多けきと

此古塚の古人も
國を治むる徳を具し
顯れすして失せける歟

學ひの海に廣けきと
心の性も賢こたも
世の譽きを聞きし

渡る船路を知らされに
身の賤しくて貧なれに
空しく鄙し終りけり

深き水底求むまの
高き峯をい尋ぬれ
千代の八千代の昔より

輝く珠も有をか
馨る本草の多けれと
人よ知らきて過しけり

實は此墓に埋もれて
詩の拙くもミルトンよ
タロムエルよ比ぶべき

業は劣るハムデンよ
國よ軍を擧をとも
人の屍もあるならん

議院の議士を服さしめ
國の安危を身よ委ね

人のおどしも外よ見る
高き譽望を民よ得る

此等れ業のかしあべて

古人何ぞあづからん

惠みをも廣く及ねど
不徳もいとど少なしや
民を惱めて利をあみす

又常々のふるまひよ
人を殺して王とあり
夢よも見まど去るとい

誠をかくすその言よ
且つ巧みある詩文もて
是の都の弊あれど

耻るを忍ぶ心の苦
富貴に媚る世の習
未だ此地よ及ぶさず

此所に生れて此所に死よ

都の春を知らされば

其身の浄き蓮の花
實は厭ふべき世の塵の

思ひの清める 秋の月
心は染みし事をた

さきど収めし屍あらの
建し石碑は今もあり
醜しとてまたび人の

記するの爲と側近く
文は拙く彫りざまの
憐を争で惹かざらん

碑面は彫る名は年齢ふ
記念の功の有そか
文句を引てえりたるの

記し、文字の拙くも
又有かたき經文の
人に無常を論す爲め

蓋し此世ふ生れ来て
別れの惜しき事もなく
心の外ふ打捨て、

程なく死する其時ふ
浮世の花の榮えを
去行く人のなかるべし

眼の光り止むとた
魂しひ体を去る時の
たとひ焼くとも埋む共

戀しかるらん身は族ら
痛く慕はん妻子とも
人の思ひの消えのせし

備又此は古人の
いつか歸らぬ旅は立ち
如何せしと思ひやり

謂れに書けど余とても
過ぎ行く後の世の人の
尋ぬる事も有からん

一からん時の此先の
老人斯くぞ曰ふからん
昇る旭を見ゆるとして

頭よ霜を重ねたる
我^{わが}儕^みに彼れが朝早く
岡よ登るを常よ見き

又彼處なる川端の
蟠かまりたる根の側よ
流るゝ水よ打臨み

枝伸の垂し山毛櫨^{ぶあ}の木。
身を横たへて晝いこひ
其常なきをかこちてん

又彼處なる常葉木の
頭ら傾け腕を組み
とゝかぬ戀の口惜しき

木立の下よさまよひて
知る人あさの歎かしき
世のうさ杯を啣ちけん

去るよ一日に彼の人を
絶て見る事あかりけり
野よも森よも川邊よも

慣れし岡よも樹陰よも
其翌朝になりぬまど
身をい現はす事をあき

又其次の朝ほらけ
正しく彼^{さん}の爲ありき
彼の山^{さん}梔^{さん}の陰よある

あかばね送る歎きけバ
君の字を知る人なれぬ
碑文を讀みて識り給へ

碑文

土の枕しこの下に

身をかくしたる此人の

富貴名利もまた知らむ
衰き此世を打捨て

學ひの道も暗るれど
あの世の人と成りけり

仁惠深き人なれむ

天も憫み報いけり

憂き人見れば涙くみ

(外に詮まべなき故に)

獨りの友の有とよ

(外に望いなるらん)

是より外ふ此人の

善志惡志共ふを深く

尋るとても詮いふ

たましひ既ふ天に歸り

後の望みをいたさつ

神にまぢかく侍るなり

○小楠公を詠むるの詩

嗚呼正成よ正成よ

公の逝去のこけかたに

黒雲四方よふさがりて

月日も爲に光りなく

惡魔を天下を横行し

下を虐げ上をさへ

慢とり果て、上とせむ

吹き来る風の腥ぐさく

絶る間のおき人馬の音

春に來れども花咲かむ

芳野の山は花見むと

訪ひ来る人の絶てなく

君が御代こそ千代々々

轉る鳥の聲聞ぬ

いづれの時ふ有あるや
嗚呼大君の御為よ

嘆かゝるまきの至りなり
振ひ起りてけかれたる

この世の塵を洗はむと
遠くあまたを見渡せば
雲の上まで屹立し

する人としては非ざるか
金剛山は巍嶷として
繋る林の木の間より

見ゆる菊水の其旗は
父の賜びし此刀
賊の頭らを斬らせむ為

實よこそ國に賢らかり
腹をされやれ為ならず
憎きもよくし彼の賊等

國の仇なり父の讐
拂へり來たる夏の蠅
熟ら思ひめくらせり

斬て捨ずし置くへきや
頃り正平戊子の春
元來よこき此からだ

若しも病は冒されて
不忠不孝と誹しられむ
死出のおこりし今一度

空しく失せし事をらば
討死するに此時を
願ひかなむひて親面たり

君の御影を伏し拜み
聞て切なる胸のうち
書き残したる梓弓

生て飯れのまことのり
衰れと江ふも愚かなり
引きてかへらぬ赤心を

誓ひし者の百餘人
物ともせまは斬まくる
討死せしさいさきよく

雲霞の如き大軍を
君の方をば枕して
勇しかりける事共あり

都も遠た村里に
忠臣孝子の鑑をと
天地と共に傳はらん

女わらへし至るまで
譽る其名は香しく
天地と共につたはらん

○代悲白頭翁歌

大竹美鳥

都の錦桃櫻

花の色香は日ふそへて

移ろゐて行く乙女子が
露は命は果敢なきを

散り行く花を打眺め
かこつもいと、哀なり

暮れ行く春は花散りて

木々の梢は緑りしぬ

眺め見あかぬ我心
花は今年も變らねど

又来ん春を思ひやる
身の行末ぞ忍ばるゝ

常葉は松も杣人が
賤が伏家の薪なり
青海原よちりきてふ

斧よふるれを忍ちよ
桑の畠も年ふりて
事さへ人の云ふをか志

過よし春の曙ふ
今もていやを諸人の
風を怨みて中々ふ

花見志人ぞ今はなき
行衛も知らぬ花の風
身の古行くを思ひざり

春毎ふ咲桃櫻

色も同じく香も同一

今年も去年へ變らねと
今年も去年より古にたり

變る人の姿なり
又來ん春の如何をらん

如何よくらに言告ん

我も昔への汝か如き

花の顔月の眉

今の頭よ霜おきて

哀れ翁よおなふけり

哀き汝も赤心せよ

幼けなかりし其日に

木の下影ようちむれて

戯き遊ぶ舞の袖

風よ散行く花の色

光り輝く高樓よ

天津乙女は歌ひて

樂しく暮れ月と日の

流きを早き飛鳥川

昨日の淵を今日みれば

瀬よ變りゆく我姿

病の床よふし柴の

戸ほそを叩く人をあき

花の顔月の眉

うつろゐてゆく世の習

緑の髪の今日見れぬ
越の國ある白山の
頭の白く青柳の
腰の梓の弓おれや

過より事を今更に
思ひ出れば中々お
千々よ物こそ恋しけれ
入相告る鐘の聲
晴よ歸る村雀
實よ常おさる世の習ひ

●寒村夜歸

小川健次郎

草木も眠る丑三を
さき道とて只ひとり
遠寺の鐘の音凄く
小笹を渡る夜嵐の

我を襲へる九折つらいをり
登るも暗らき杉村を

洩来る月の片くれを
何地おりけん梟の

聲より外お友もなし
斯る淋しき土地おれど
住めば都お鬧がしき
車お塵をかゝらぬば

權貴お門よへつらひて
名利お追はれ牛馬お
まけぬ重荷を負ひ擔しよかつお
我と我身お使たる、

苦痛はしらて春お花

夏お螢や郭公

秋は鹿の音月雪と

四時をりくくの景物を

我もの顔ふえてあそふ

身は昭代に棄村とい

自らゆるし友も亦

飄一ツふ王公や

貴人も知らぬ快樂の

多き此身を神ふ謝し

謳へハ返を谷の山彦

○西詩和譯

大竹 美鳥

此詩原アレツトハートノ作ニシテ謹々三章一百
字妙味蓋シ言外ニアリ今之ヲ譯ス譯語ノ拙ナル

ヲ以テ原詩ヲ推ス勿レ

暴風あらち小雨を吹たませて

最あすさまじき聲をなす

海面うみつらさあそと思はるれ

岸うつ波の音高き

今日は漁業休みあん

嗚呼畏ろしき聲斗り

右一章

獸の踪あとを尋ねん

いとく難し今日に空

岩間いわまふ哮ほおる獅子もあま

谷間にうらぶ嘯く虎もあれ

今日は山獵やま休みあん

嗚呼畏ろしき聲斗り

右二章

海うみに幸さいちある舟子とも

山やまに幸さいちある獵さつ男とも

市いちに飯いひれはあは如何に

さたの地震に家つぶれ

此所も彼所も怪我人の

嗚呼畏ろしき聲斗り

右三章

詠史

武士の石をえとしもさへつゝ其名うれせぬ楠の
 木のやまを心のくもりなく君よつかへて國のため
 ありさか山よたておえりあるは千早お吹をろすを
 ろしれ風ふかたきらいたまりもあへをさりくくと
 散行さよけりつかの木のいやつ死くおうちよせ
 て又引かへし攻め来まば今はあごまよ死をはやせ
 心極めて櫻井の里よかぶる言の葉を子に教へつ
 つのふし置其身のやかくつはものをうちしよかへ
 て湊川そこをふかみて赤心よ謀りし事もあわとな
 り消えて戦の敗れとる豫てかくそと空よ満つ倭心
 の三吉野の花と散てし隣まさを早くも仇の傳へ聞
 き輜時しまどろむ夢をさへ驚かおんとむらさもの
 心をつきて君が爲盡す心いたゆみかく家よ傳へし
 みせらりの梓の弓のなさかまよいるてふ事を記る
 一置吉野の山よかほれるも實ふたくひなさ丈夫れ
 親子のらからのこらまも國を枕よあしてける赤死
 心を今も世よ傳へ聞くだよ身もさふくありよける
 かと適はままをらを

反歌

古一へをさしくまきけり湊川

世は流れぬる名を慕ひつゝ

世を経つゝ朽せぬ名こそ楠の

石となりぬる記一なりけき

元治のはじめの年都ふ事ありしより此かた公の
おほん爲し命うしなひ一人々の祭り行ふとて讀
める

●吊忠魂歌

從三位 毛利元徳

かゝなへて過にしかこの年よめり十あまそみつの

そのかみの空よあやまき雲おちり大内山を立こめ
て光りさやけき天つ日をおほひ曇らまところやみど
おせるを歎き我いへにつかへ一人ら赤心よおもひ
はかりてもどかしのもとのとくは九重の雲井の空
をさやかよも拂ひてまかと言たてうち出しもの
を其ことのなるをてつひよその人も都の野へのま
ら露と消まけりかもその身のさへ果ぬれとほと
もなく其人ともものにかりつる事の如くよいよへ
ま大まつりおとかへりつるもとをたどりてあいま
く此人ともの大君のおほみためそと玉さのる命
捨まじ江たちよりなれりともへに己れらかかく明

らけき大御代のみいつく志みよあふおともこの人
とえの國のため。のこし置つるいさを志と千歳のの
ちにかたりつかま

反歌

雲晴てきやけくなれる天つるを

あふきもあへす失し人はも

あた波をかへしもやらて徒らふ

屍ねみつきし人そかを志き

新体詩歌第四集終

新体詩歌第五集序

形象粲然皆十寫シ出スヘキ者ハ玻璃鏡ノ巧ナリ清
濁ノ音互ニ和スヘキモノハ大筒琴ノ妙ナリ夫レ玻
璃鏡ノ寫大筒琴ノ和巧ハ則チ巧矣妙ハ則チ妙矣然
リト雖氏長ク其ノ形聲ヲ留ムル者ニアラサルナリ
今ヤ二者ノ巧妙ヲ無子數千百歳ノ後ニ垂レテ而滅
絶セザル者アツテ存ス焉其唯詩歌カ紀伊人竹内君
洋ノ東西ヲ問ハス時ノ今古ヲ論セス諸名家ノ詩歌
ヲ網羅シ嚮キニ既ニ四集ノ編アリ命シテ新体詩歌
ト云フ頃口又第五集成ル卷ヲ開ケハ則チ粲然煥然
然シテ以テ目ヲ喜ハスヘキ者アリ鏘然鏗然以テ耳

ヲ娛マシムヘキ者アリ千様万態一ニシテ足ラヌ其
 他聲律ニ應シテ而性情ヲ寫ス如キニ至ツテハ能ク
 鏡琴ノ寫ス能ハサル所ヲ寫ス者而喜怒哀樂不平無
 聊ノ意見ハル焉玻璃鏡モ其ノ巧ヲ賞スルニ足ラス
 大筒琴モ其ノ妙ヲ擅ニスル能ハス詩歌ノ聲形百卅
 ニ傳ヘテ而益高明ナラントスルナリ嗚呼後ノ此ノ
 編ヲ讀ム者魚龍曼衍ノ戯ヲ觀ル如ク黃帝咸池ノ樂
 ヲ聽ク如ク心目眩亂精神酣暢奇ト稱シ快ト呼ヒ樵
 漁婦女ノ愚ニ至ルマテ皆ナ詩歌ノ樂シムヘキヲ知
 ラン詩歌ノ樂ムヘキヲ知ラハ漸遙カニ學門ノ墻ヲ
 望ムヘシ然ラハ則チ此ノ書ノ出ツル天下ノ又運ニ

關スル輕カラス矣其ノ体裁ノ如キハ舊様詩歌ノ解
 シ難キニアラス極メテ簡易ニシテ皆其ノ趣キヲ新
 ニシ別ニ生面ヲ開テ人ノ意表ニ出テ名テ新體詩歌
 ト云フ固ヨリ其レ當レリ矣序ヲ徵スルニ及ヒ再三
 辭スレトモ得ス終ニ書シテ以テ其責ヲ塞グト云爾

千時明治二八歲癸未八月中浣

靖民首藤次郎識

新体詩歌第五集

嶮谷竹内 節 編纂
蜻氏 首藤 次郎 校閱

●世渡りの海

小川健次郎

宜も出米も賣りたり
こけて今年としごみの秋穫を
又とあらしな國本も
爰よかゝると聞からよ
すき返しても長き日の
それのみならを霖雨しづかめや
夜。目。寐ひをふ引板ひたの番

往来の人も稻のまみ
見れば農布どよき業の
あゝに基ぬし民命も
劔をうりて鋤をかひ
腕も肘も不さうよ
早よ水ひたのかけ引や
さるに一日野も山え

野分の風の無慙や
世の常なきを啣つより
嗚呼六づかしの世渡や
物うる業のむかへおそ
國の光ひかりえ身の幸さいふを
非とときけば矢も楯も
輸出輸入の平均や
取もどさんと健氣けんけいなる
あへなく外ぐわいれ慢幕の
賣れば借られ買へば損
さへで果敢はかなき雲霞

泣くふもかけす取分て
外せうは詮術せんじゆつなかりけり
賤しといへど今の世の
もとむる道もあの外に
はや溜らじと投げ捨て
彼よ得られし高權を
胸算用の正場を
設け處が埒あきもなく
杖と頼み資本しやほんも子も
あらしの庭の花紅葉

世の常ぬきを啣つより
嗚呼六づかしの世渡や
棹一本よ浮々と
遊びがてらふ渡らるゝ
危険を怯ぢり畏れむ
日頃の伎倆顯ひす
よるべき蔓を求めねむ
共に根のなきうき艸の
誇ふ人なき身の不運
月に肅き花よ酔
世の常なきを嘆つより

外ふ詮術あかりけり
此所の泊りや彼所の港
舟子も暴風お危険あり
名譽の海よ乗り出し
いと易けれど夫とても
よし覓むとも其蔓も
憂き艱難をよそよ見て
わり裂く胸を押鎮め
流るゝ水を友として
嗚呼六づかしの世渡や

世わたる業の多けれど
つきて廻るの諍の
れを羽色の蝶鳥の
其生活の習ふより
傍目をふらむ一をらに
又あすよりと工夫して
其熟練の遺傳とよ
勵み進めばおのづから
一日と樂し傍目より
嗚呼いとやすの世渡や

彼は利あまきば此に害
畔を走るも田を飛ぶも
おろか事よ細虫すら
おれし手業を怠らず
明日はけふより明後日
祖先の立てし計畫と
光りを加へ漸く
我を去らずよ一日より
羨むこそ忍をさく時の

●夏夜即事

小川健次郎

晝の暑きいゆふ立よ
か、やく月に置わたま
玉を欺く玉たれの
いとも涼しきむら竹の
疑ふいばかりおと細く
千ひらの金ぞ一刻を
猶明け易き夏の夜の
口さかなくも愚かよも
蚤蚊や蠅と打つけよ
おもひを焦す螢火や

あらひ流して峯高く
千草の雪のはらくくと
小簾の返しよ吹ちりて
葉越よ秋や来ぬるか
庭の覓もきこゆあり
惜みし春の宵よりも
價を誰かさたむべき
夏いうるさし又暑し
賤ていふいひすして
昔の人の袖の香を

あつたのぶ軒端の橋よ
訪ふ人もなき草の戸を
物の衰れをゆめふだふ
静し観れば四ツの時
あまを慰め樂しきを
今日のあたり覺へたる
つゝむとをききど夏衣

はつねをもらす郭公
叩く水鶏よやぶる、
あつたで寝過も人からん
うつり變りて物ごとよ
深き方便をゆくりかく
其嬉しきと樂あさを
吹返したる峯の松風

●送學友歸郷歌

大竹美鳥

五年六年諸共よ
互ふ勵まらばま一つ

同一學びの窓の内よ
慰められつ慰めつ

光此どけき春の日也
五月雨さみだれ晴れぬ夏の日も
いと楽しく過とぎ去たり

月かげ清た秋の夜也
雪ふり去たる冬の夜も
いとうれしく暮し息

月日の流を早くして
昨日きのう諸共住ままじし
明日あしたの旅路みちに出でる
かしまだち今祝ふなり
いざやほせく其酒を

五年六年とく立てち
學まなびの舎いへを出いり
ともあり師しある君達きみたちの
祝いわいの酒をまゝむなり
いざやくめく此酒を

歌へや舞へや皆共に

舞へや歌へや諸共に

今日けふを限かぎり明日あしたより
敵かたきといふ忌言いみことば葉
難かたきも難かたき事ことをらす
聲こゑをば雲井くもいよ上あるある

又逢またあふ事の易やすきや
雲くもをも排はく心こゝろあらは
月の前まへゆくほど、死しす
あれ見みよ高たかく上あるある

さといへ心有明の
行衛思ゆゑへばうたてや
朝あさの淺間あさまの烟けむりりかも
天あまと地つちと此間こゝをば
隔へだてのあらじ西東

月影つきかげかぐす村雲むらの
浮世うきよの事ことは似にたる哉
暮ゆふの鞍馬あその霞あせみかも
家いへとち一つ、過とる身みの
北きたも南みなみもみなる同おなじ

同まをト團坐ゐの友人よ
浮世の事の何事も
さりとして心かくらすな
斯く去て後よ恩ふ事
風ふれ拂ふ雲間より

雲になやめる月を見よ
思ふまゝよのちらぬ共
耐へよ忍べよ怠るを
かなふ者とよ見よや人
月の出たり顯ひれたり

嗚呼面白の景色やを
明日の最れの最つらき
取れや人々酌む酒の
深れ契りを忘るるよ
月もろ共よやまらひて

そぞろうき立つ思哉
愁を掃ふ玉のひき
つれぬため去も有磯海あゐそ
寝ずもあまや今宵一夜
歌へや舞へや明るまで

●見二燭蛾一有レ感

時しも夏の闇の夜よ
東の窓の其下よ
涼しき風を送り越し
いと美しき蝶々の
取らまくどまる有様を
深く心よ藏め置き
抑も難を企つ
又其本を見ざりせば
等しき業やあまからん

犬山居士

文書かんとて我庵の
燈あかりともせむ庭の木
衣を通しふくにつま
ひらひらめれ来り燈あかりきて
見まの悟の有磯海
守らんとまる事である
悪きとよのちあらぬども
今しも来ありし蝶々の
焼てん思ふ其火をば

取まくをる愚ならず
なきまくするの愚なり
其身失せての遂がぬ
あめて其身を焼もせず
進みて後よほまれ得て
名譽の人と呼の、きん

死してを難き其事を
其身ありてぞ事遂ぐる
さきば撓まぬ心をむ
死しもなさぬ道をと
後よ鑑を残すべき
名譽の人と呼の、きん

●湘南秋信

昨日けふと思ひしも
旅よのふれぬ苦しきよ
雲の通路断江すとも

早一月の旅衣
眺むるもの空の雲
断えくゝなるの文の面

鈴木券太郎

あまの来よけん友便り
偶にはあれど其さへも
有る者として無りけり
いかよ見物か其とても
泣よふかれず兔や角と
知るや知らずや秋は霜
衰れを見舞ふ氣合あり
あるの馬入よ馬を侶
大和心のゆる瀬かさ
都は人よいらせんも
今年のみれり豊けさよ

あさての又親や妹
要事のけと何もかも
まいて王子の紅葉だも
想ひやるはみ詮術も
葉も暮すの愚か、も
千艸ふか、り照月も
木の葉の落る音づきも
またの雨降ふ雨よ菰
思案あげ首池の鳧
外ふのあらど是のそを
民の命のかゝる紐

来るハ春の事までも
君が代おきや有だた
田舎の住居より然かも
酔て管まく其代り

嬉しく思ひ云まくも
白きを語る丹丸肝
露の恵みの深さふも
東京の模様知らせたえ

蜻氏評云句精巧押韻自在敬々服々

●チヤールリス、キングスレー氏悲歌

外山仙士

無常を告ぐる入相の
三人の漁夫の帆を上て
走らも船の進めども

鐘の音はるたそがれに
入る日を指て西の海に
妻子の爲より引かざる、

心の中ハ皆同ト
沖に向ひてイめる
まうけの薄く子澤山
洲は打掛くる浪音の
縁がよやならぬ男の身

父の出船を眺めつ、
童子の外お餘念お
雨の降る日も風の夜も
最とまさまよき其時も
袖にひぬ社の女子の身

三人の漁夫の妻三人、
鐘もほのかお聞ゆれば
火を挑んと立寄りて
窓は戸開けて眺むれば
空軒過くるむら雲の

日も西山より入相の
共に籠りて燈臺の
つまめる心の夫思ひ
驟雨やら暴風やら
色黒々と物をどし

暴風あらし如何に吹けばとて
洲かぜふ打掛る浪音の
縁かぜがよやならぬ男の身

水かさ嵩如何に増むとて
如何程までく聞ばとて
袖かぜはひぬの女子の身

朝日か、やく砂磯いさごよ
残るの三つの屍かばねぞ
歸らぬ旅たびの門出して
髪かみ振り亂し取まがり
目も當らまぬ風情かぜなり
袖のひぬの女子の身
一日も早くた樂しめをせん

潮引き去りて其跡あとよ
三人の漁夫の妻三人
歸らぬ夫のあきがらよ
消る計りよ泣なみき入りて
縁がよやならぬ男の身
一日も早く世を去まば
屍まがいの跡の砂磯いさごよ

寄せ来る浪の碎くだけつ、

鳴なり龍りゆう鳴れよ云・儘ままよ

●詠松島歌

遠藤信道

島はしも 許多あまたあれども 浦はしも 多おほいあれども
も 陸奥みちのけの松島の浦は 島がらか 真細まこか島 浦
柄えいか 愛いとき浦其浦の 小島北崎ゆ 打見うちみる島のさ
さく 搔見かきる 磯の崎かちを 船うい浮うて 廻まわらひ
見れば 小女の 眉まゆ曳ひなして 寶が崎の 南へ奔
り 鹽尻しほじりを 伏ふたる如く 富山の北へそ、り 西
へ空 振放見ふりさければ 飛鷹とていの 大山をびへ東を顧み
まれば 宮戸の蛇たま靈り峯かみ立り ちちくくの 其山の

間ま 百八十ひゃくはちの島こそ並べ 夕煙 霞の浦 淺緑あさみどり
 青柳あかやなぎの島の 時自久ときじくは春めく島か 久方くわがたは月見の
 崎さき 苗指挂あかざさの島の 常とこ一へふ 秋立島か 火打島
 附木つけぎの島の 復またの夜よ 海士あまの焚たきある 漁火あさりりの
 残のこれる影かげか 風かぜ河がる寒風さむかぜ澤さわの湍たぎと 浪なみ騒さわぐ龜島
 の磯いそは 嵐あらし吹ふ 冬ふゆの餘波あまか 玉手箱 二子の島は
 二並ふたび 睦なごみし見み見みゆ 丈夫まをらの 鎧よろいの島 武夫むのうの
 兎うさぎの島の 彌や猛まうく 雄おとこ々々くみゆ 腰細こしの天女あまめの
 島の 白髮まら附が翁おきなの島の 宜よろしけく 向むかひて居ゐれり
 八千矛やちぼこの 大國おほくに島 鯨釣くじり夷やが島は 兄弟けいからの 並ならび
 て立たり竹たけの浦うら来きたよる白玉 福浦ふくよいよる 玉藻たまもを

深ふか海うみ松まつの拾ひろひてありば 潮垂しほたる苦屋くやの汀つら あひ
 一ひととも 海人あまは思おもはず 盗人ぬすと人ひとの雖言いへば 崎見さき見み
 言こと 豊ゆたかよ立たて 物掠かそむ 懐おももあい 蛇崎へびさきと人ひとの雖
 言こと 崎さきみれは 長閑のどく出でて 物ものら吞のさかむ口くちを
 雅士みやびの墨畫すみゑは島 鳴島なは濤うたが浦うらと 風雅みやびに負たへ
 る島の名な ふぞろしく 負おる浦うらの名な うべなうべ
 な松島まつは浦うらの 真細まこき島の 真秀まひ島 愛いしき浦うらの
 真浦まほらと 神代かみよより 今いまは現うつに 語繼かたりつぎ 言繼いひつぎ
 丸木まる舩ふね 榜たきもと布ぬきて 萬段よろづ顧かへみまれど 見る
 毎まに館たねぬ島のかも あかぬ浦島

反歌

松島の八十島あけて漕行ば

浪の穂へふ黄金山見ゆ

●佐久間象山の謫居の歌

佐久間象山

信濃路の ひをふいあれど うらくはしやまにも
のよも てるさきの はなさきを、り 秋つるの
紅葉ふほへり ををめで、のゆき山ゆき あまつ
日れ くる、もあらず遊ぶなる 人もさのあり
去かれども さそらふるみの春の野の 花もかざ
さず 秋山に 紅葉をも見ず たらちねれ は、

此かふこの まゆごもり こもりてながく 年ぞ
経にける

反歌

君がためたちはしりせむをべをおみ
あたらよひのわいらくをしも

●西南の役より凱陣せし人を祝するの歌

久方の 空も長閑のどかよ あら玉の 春を迎へて 秋
津島 風も静よ 祝ひつる 程もあらせず 武士ものぶ
の 八十やそ氏川に 立さあぐ 波のよるひる いそ
まなく 君の臣らを引連れて 臣は君よも 従ひ

て 軍の庭ふ 魁^{さき}かけて 打つ討れつ すがあか
 一 實^ひよいやま^ましき 大丈夫^{まじろ}の わかきはらから
 二人りづき 向ふ矢庭よ 飛くるに 雨か霞か
 白龍^{しろりき}の岩をも碎く 黒鐵^{くろがね}の 玉よ當りて はら
 からの 世にあき人と ちりよきと 古郷^{ふるさといき}人の
 傳へ聞え皆打守りて 歎^{あな}さある 折しも事なく
 歸り来てめべり逢瀬^{あふせ}の ありけるに まもらたけ
 をの 潔^{やま}ぎよき倭^こ心を ちろしめを 弓矢の神の
 恵みよて いさを、世々に遺^{のこ}事をるらん

反歌

くろがねの玉もとほらの大丈夫が

君よつりふるやまと心は

●詠石菖歌

滋野貞融

おちよとももの御國よありあがらこゝの名にを
 く漢籍よ見えたるその名をもちあるたぐひか
 ずをなからずあむある石菖はたゝのひとつ
 なるべいかゝるたぐひの文詞よこそ石菖をど
 かきもまき歌詞よむべきあらねばそのた
 ぐひよつきてあやめ草といえむからよあれあ
 らをとしもいひてうべをいざらむしかのあれ
 となちまざれぬべけきばそのいはほよあふる

よつきて私に名つけて岩あやめといふそのう
へりこ縁劔真人まゝ劔脊草などいへるも
をかしけまばこあままたの名をつるぎ草と
いひはまし山本晴香石菖をおくま^かり字を正宗^{まさむね}
といふあれをむじが家の正宗ありけるかくい
ふ天保八年水無月

古の道踏學ぶかたはらよなるよ手はなさむつるぎた
ちとればを、しくそのにほひみまばおかしく村肝
の心のゆきぬ神代よりこれつるぎたちつくとふ
人にお係けま人の世のよの未なるがら鎌倉の正宗あ
その此道の聖^{ひじり}なりけれそのをへうけつかひてし

義弘の亞聖則重にかしこかりけりわが家よもち
つたいふ義弘の作る太刀のわか、りし布どの
まさびにつくりつるものよあれを此道の物識人
ふしめすべきものからなくよこれひとりめでこ
をあれ源のはるかの子とふみやびをがもちつたへ
よ則重がつかれる太刀のむかしこの川中島よま
すらをの名をと、めたる山本の老翁^{おきな}がものかも遠^{とほ}
祖^{つひ}の名代とあがめ今の世の人ふしめせりこれさへ
もみれむうるまきうるしきわがえらからがつた
へつるその則重とまがもたるこの義弘もはらがら
のつらよあればこの子らが親としきこへ此道の

^{ひこ}聖といへる正宗がつくれるこそゆめふだに見ま
くほりきれいかよして見るとを得むいかよして手
よたふれむとつねふもおもへるおのが心をばあ
る人ぞしる窓の内よそのびめもたる岩あやめ草の
かほけきいつのよふいかなる人のすさびにか名を
正宗とたへけむつるぎなしたるつるぎ草これよ
かくまひむかかたは緑す、しくはがねはもあろく
ふちへり朝あしたよ真清水たへそれさまのおちふを
ぞ見る夕ざればともいびか、げ其つゆの玉をこそ
見れ正宗かそはあらねども末の世れすがたよあ
らすこそを見見る我あ、ろこそみお人の得がてよす
とふ正宗を得てこ、ちすれ枕太刀たちよあらべて
いよへの道ふみまおぶうたをらよこそをあかさ
てつねふかえ見ん

新體詩歌跋

登高必從低焉行難必從易焉故治天下之事物必有順序
 序々々何那曰當行事物之日不可必欠者恰如涉河海
 必用船舶也夫助國家開明進人智發達則左于學矣雖
 然學有難易故初學脩之隨其順序從易及難而勉之則
 易覺而易學也然余觀察當時人情百事唯期速成不顧
 其順序等直學難而措易所以其困難不可言於是乎遂
 半途而挫折其志不達目的者甚多矣譬若登梯子追序
 隨段而不踏之直將飛越達其上則有陷墜之憂而無上

達焉夫然則豈焉得為國家開明進步之裨益哉方今
 我國行民間彼俚歌俗語是其最易々耳兒童語之走卒
 誦之而猶感發人心不鮮少矣然未有我國翻譯泰西之
 詩歌而公世焉是余等所常為遺憾也今也竹內君有志
 于此蒐集係諸大家翻譯之泰西詩歌與我本歌而名曰
 新體詩歌既有第四集之編焉今又第五集編成示余且
 徵跋余受而誦之風調溫雅能得其體而語甚不高一誦
 之解其意也而熟讀玩味則覺字々有慷慨句々如金玉
 鏘戛餘音嫋々意味益深長然而一章快一章讀未半不

覺拍案曰噫是真天下之快歌也余前所謂俚歌俗謠猶感起人心不少然況於此集乎一流布民間則感動人心發舒其志氣而人々抱進取之氣象至遂探學文之深與以進我國文明之度昭々明於見火矣然則此集益於世教果幾許哉感激之餘聊述鄙言以為跋

于時明治癸未八月上浣唇交櫻陵居士

廣瀨要人識

秀

Mateo
茂木大秀
茂木秀樹

明治十九年四月十九日
全 年 五 月 出 版

和歌山縣士族

編輯人 竹 內 隆 信

北郡留野甲東村
百拾一番地寄留

東京府平民

翻刻出版人 鈴 木 金 次 郎

日本橋區通り
壹丁目壹番地

Seiran